



自らの体験をもとに 先読みした銘柄が軒並み高騰

お金がテーマの著書を中心に400冊以上の本を上梓した人気作家にして、中堅上場企業に匹敵する富を築いた実業家。さらに“お金のご意見番”として、長年活躍した経済評論家でもあった邱永漢。その前半生は流転の連続だった。

日本統治下の台湾で生まれ、東京帝国大学経済学部に進学。戦後台湾に帰国するも独立運動に参加した^{とが}咎で政治犯となり、香港に亡命。対日貿易事業で成功を取めた後に再来日し、香港時代の経験を綴った小説で31歳

だった1956年、外国人初の直木賞を受賞。編集者の助言でマネー作家に転じた。

1960年代から株の売買を本格化し、自身の取引でも大きな利益を計上。発揮したのは、自らの体験から得た時代を先読みする力だ。投資指南においては、評価の定まった一流株ばかり買う当時の風潮に異を唱え、「株を買うとは、無配が有配となるプロセスを買うこと」と、今後伸びそうな企業に投資する成長株買いを推奨した。モーターショーの盛況を目撃し、自動車時代の到来を確信した際は、道路網拡大に不可欠なトンネル掘削技術を持つ建設業者などに注目。またこれからは既制服が一般化するとアパレル企業など

「株は無配が有配になるプロセスを買え」 成長株投資の醍醐味を 日本人に教えた「お金儲けの神様」

も発掘。当時は無名だったこれらの会社を「成長銘柄」として雑誌で紹介すると、「銘柄選びの達人」としての評価が高まった。

実業家としてもドライクリーニング業などの事業に相次いで参入。特筆すべきは事業ごとに会社を作り、各社に不動産投資を行わせたこと。月々の家賃収入を稼ぎつつ不動産を担保に融資を引き出し、より大規模な事業に踏み出す足がかりを得るのが狙いだった。

さらに「お金は儲かるところに動く」と、事業を海外へも拡大。1970年代以降、政情変化で帰国を要請された祖国・台湾でも貿易業やゴルフ場経営などを積極的に行い、米国の不動産にも投資した。

中国市場の可能性にいち早く着目 84歳で上海にカフェを開業

人生後半に注力したのは対中ビジネス。中国の巨大市場の潜在力に着目していた邱は、「日本で縮むパイの分け前を奪い合うより、

毎年大きくなるパイの分け前をもらう方が簡単」と、1991年、67歳で香港に拠点を移し、様々な日本企業の中国進出を支援した。ビジネスへの意欲は晩年になっても衰えず、中国のコーヒー需要拡大を予測し、自らも79歳で雲南省でコーヒー農園事業に着手し、84歳で上海にカフェを開業。日本、台湾、米国、香港の4カ国・地域で稼いだ資産総額は2,000億円を超えたとされる。

邱にはお金に関する格言も多い。中でも有名なのが、「お金も人間と同じように淋しがり屋で、仲間のたくさんいるところへ集まりたがります」。投資や経済の本質をついた言葉として、耳にしたことのある人も多いのではないだろうか。また、「見える景色の向こうを見よう」「お金は儲けただけでは半製品。使って初めて完成品となる」の2つは、無一文の亡命者が鋭い嗅覚と予見力を武器に巨万の財を一代で成した秘訣を、端的に言い表していると言っていだろう。

邱 永 漢
1924～2012年

きゆう・えいかん ●台湾生まれ。東京帝国大学卒業後、台湾独立運動に関わり、香港に亡命。30歳で再来日し、31歳の時「香港」で直木賞を受賞。作家活動のかたわら、日本、台湾、中国などで株式投資や不動産投資、会社経営を行う。56歳で日本に帰化し、67歳で香港に拠点を移す。『金銭読本』『食は瓜州に在り』など著書多数。